臣ファブリス伯の夜会に招待されている．鷗外はそれぞれの会について，『独逸日記』に概要を記している．

しかし，こうした名誉な会への出席について，森家は全く知らず，鷗外も知らせていないことから，虚構ではないかという研究もある．

しかし，筆者は，

「私は収集した公文書から，『独逸日記』のこのことに関する記述はたとえ多少の誇張はあるにせよ，事実だと考えている」

と断じている．

本書では，随所で，「私は」と推論を含めた私見を大胆，かつ個性的に述べているのも特徴である．

たとえば，鷗外の大学卒業試験にまつわり――，

「私も卒業試験を受けてからもう六十年にもなる．試問の問題を決めるために，宮島のおみくじの箱から竹棒を引かせる教授がいたのを思い出した」

また，いわゆるエリスとの結婚が反古になった理由に，彼女の「其源ノ清カラサル事」があったといわれている――．

「私は「勿論其源ノ清カラサル事」というのは，鷗外が一度誓った婚約を破棄したのを指していると考えている」

本書は医者の目で見た画期的な鷗外研究書であり，鷗外の留学から帰国にわたる人生を俯瞰して研究するには恰好の一冊である．

（山崎　光夫）

［思文閣出版，〒605-0089 京都市東山区元町335，TEL. 075（751）1781，2014年7月，A5判，352頁，3,000円＋税］

渡邉洋子 著
『近代日本の女性専門職教育
――生涯教育学から見た東京女子医科大学創立者・吉岡彌生――』

本書の構成は，序章：吉岡彌生研究の現代的意義，第1章：課題と方法，第2章：吉岡彌生にとっての医師世界とアイデンティティ，第3章：女子医学教育の構想と実践，第4章：「女医」像＝キャリアモデルの構築，第5章：ロールモデルとしての吉岡1――「女性医師の生き方モデル」の提起，第6章ロールモデルとしての吉岡2――リーダーシップから国策動員へ，終章：吉岡彌生と女性専門職教育―「生涯キャリア」への視座，特論：現代女性医師をめぐる課題と支援可能性，となっている．

本書の課題は「『女性参入型』専門職域における女性専門職論の成立基盤と構造を解明するとともに，女性専門職教育で提起された専門職像（ロールモデル）の機能と歴史的役割を吟味し，女性の『生涯キャリア』への今日的示唆を得ること」とされている．そして，著者は，そのツールとして東京女子医科大学創立者吉岡彌生に着目し，その生涯をジェンダーおよびキャリアモデルという視点から分析する．

著者は，専門職領域における女性比率が飛躍的に高まっている現在においても，医師，弁護士といった「古典的専門職領域」における女性比率が低いのは，今なお女性が「他者の活動を下支えする役回り」を多く担当することによると指摘する．そこに参入する女性は，さまざまなジェンダー秩序，ジェンダーバイアスにさらされており，いかに専門職アイデンティティを構築し，生涯にわたるキャリア設計，人生設計を展望できるのかは，まさに現代的な問題とする．

著者によれば明治以後，「女医」は男性を前提とする医師世界に「招かれざる」存在として参入

した．そのため「女医」は，国家・社会の要請や期待を受けて調和的に生み出された女性教員や看護師などの「女の職業」とは対照的に，明らかに特異な存在であったという．そうした中で，吉岡彌生は医師になり，家庭を持ち，女医学校を創立して後継者を養成し，さらに社会的指導者，国策動員指導者となった．著者は，その過程で吉岡が自らをロールモデルとした独特の「女医」という職業概念を作り上げたとする．

著者は吉岡の著作とその活動を精査し，彼女は医学を学んだ済生学舎での体験から自らの「女医」アイデンティティに目覚め，それが「女医」養成の主要動機となったとする．また筆者は，吉岡が学生たちに「女医」となるための鍛錬主義をはじめとする様々なノルマを与え，さらに「女医」と「男医」の適性と職域をめぐる男女「棲み分け」という独特の理論を提唱していたことを指摘し，吉岡自身が規定した「女医」というキャリアモデルが学生指導，さらには卒業生の「女医」としての在り方に反映されたとする．

このような吉岡の「女医」アイデンティティは，彼女のライフイベントの変化に応じて「キャリアモデル→『仕事と家庭』両立モデル→社会＝国家的リーダーシップモデル→国策動員指導者モデル」と変化して行った．仕事優先モデルから「仕事と家庭」両立モデル，そして社会＝国家的リーダーシップモデルへと吉岡はその軸足を移動し，さらに戦争を跳躍台として「女医」のさらなる国家貢献を求めたことを著者は史料によって明確に示した．そして，それが逆に吉岡が育成しようとした本来の「女医」の在り方自体を変質させてしまったと指摘している．この指摘は，これまでの吉岡彌生研究には見られない興味深い指摘である．

日本近現代史における吉岡彌生は，女子教育に燦然と輝く功績を残す一方，第二次世界大戦争中の国策動員指導者として戦争責任を追及されるという，相反する評価がなされる人物である．しかし，その二つの要素が一体であることを，著者は吉岡が確立した「女医」というキャリアモデルを通して論証した．本書を通じて，吉岡彌生という「女医」の生涯と時代における役割が明確に定義されたといえる．

しかし一方で，「キャリアモデル」論だけでは論じきれない吉岡の一面も見逃すことはできない．その一つが，「家」に関する理解である．吉岡は封建的な家制度には縛られない人物であったが，自らが築いた「家」を非常に大切にした．それは，家族，親戚はもちろんのこと，私塾として始まった学校や在校生，卒業生，使用人まですべてを包括するもので，国家すらその視野に入っていた．家に縛られることからの女性解放ではなく，「家」を利用しての女性の躍進を吉岡は試みた．それゆえに現在においてもなお，「彌生先生」であり続けるのである．

吉岡の提起した「女医」アイデンティティが，現代という時代にどのように作用するか．それは現代の「女性医師」に対する様々な取り組み，働きかけにも繋がるものである．しかしそれが既存のジェンダー秩序への眼差しを曇らせるものであってはならないと著者は最後に述べている．吉岡が作り上げた「女医」を払拭する新たな女性の「医師」を育む環境，あるいは意識が社会的に形成されることを願うものである．

（三﨑　裕子）

［明石書店，〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5，TEL. 03（5818）1171，2014年11月，A5判，316頁，5,200円＋税］